

大学生版いじめによる影響尺度の作成

飯盛 正幹*・加曾利 岳美**

The purpose of this research was to develop a new scale named the "Bullying Influence Scale for University Students," which can measure the influences of bullying by position-victim, bystander, spectator, and arbitrator-in participants' past school life. A questionnaire was administered to 236 students from two universities in a metropolitan area.

Four factors were extracted from the data: "interpersonal anxiety and personal distrust," "self-centeredness," "self-assertion and interpersonal assistance," and "pretending not to watch and self-defense." The Cronbach's α coefficients were .92, .84, .85, and .72 for the four factors respectively, and .93 for the entire scale, which showed sufficient reliability.

The correlation coefficients between all the subscales were significant. The good-poor analysis and the item-total correlation showed sufficient adequacy. In addition, the Pearson's correlation coefficient showed significant positive correlations between the subscales of this scale and the related subscales of the "Bullying Influence Scale" (Katori, 1999). It was confirmed that the newly developed "Bullying Influence Scale for University Students" has adequate validity and reliability

Key words : bullying influence, scale, university students

1. 問題と目的

近年、我が国においては、学校現場におけるいじめの問題が益々、深刻化してきている。文部科学省（2006）は、いじめを「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」と定義している。国立教育政策研究所（2013）が行った調査では、週に一回以上の頻度で日常的にいじめを受けている児童・生徒は全体の10%前後に及ぶことが報告されている。ま

た、文部科学省（2014a）は、いじめの認知度は、小学校が50.1%、中学校が33.3%、高等学校が55.1%であるとしている。さらに、国立教育政策研究所（2010）の研究では、小学校高学年の3年間および、中学3年間でいじめ加害・被害に関わらなかった児童・生徒は、それぞれ2割程度に過ぎないことが報告されている。これらの報告から、「いじめ」は各学校段階において日常的に生じているだけでなく、どの児童・生徒にも生じうる問題であると言える。

国外においては、Analitis, Velderman, Ravens-

* 志木市教育サポートセンター

** 人間学部心理学科

Sieberer, Detmar, Erhart, Herdman, Berra, Alonso, Rajmil, & European Kidscreen Group (2009) が欧州主要 11 か国の 8 歳から 18 歳までの児童及び青年を対象に調査を行い、全体では 20.6%、最も低い国であるハンガリーで 10.5%、最も高い国であるイギリスで 29.6% の者が、日常的に「いじめ」を受けていることを報告している。また、Nansel, Craig, Overpeck, Saluja, Ruan, & Health Behaviour in School-aged Children Bullying Analyses Working Group (2004) は、欧州 25 ヶ国のいじめ加害者、被害者、またはその両方を体験した者の割合を調査した結果、「いじめ」に関与した子どもは、最も低い国がスウェーデンで 9%、最も高い国がリトアニアで 54% であり、いじめ被害者は、全体で 11%、スウェーデンでは 5%、リトアニアでは 20% であったと報告している。

このような中で、近年、いじめの影響に関する多くの知見が提示されてきている。坂西(1995)は、いじめ被害経験によって自尊心が低下することを明らかにしている。三島(2008)は、親しい友人からのいじめを小学校高学年の頃に体験した生徒は、しなかった生徒に比べ、高校時代に学校不適応感をより強く持ち、友人に対する不安・懸念が強いことを報告している。村山(2015)は、いじめ被害生徒には抑うつ傾向や自傷を行うリスクが高く、加害生徒には攻撃性が高く、加害・被害生徒には非行を行うリスクが高いことを報告している。小山・庄司(2012)は、いじめの加害経験は感情調整におけるレジリエンスを低下させることを報告している。森本(2004)は、いじめ被害経験のある者はない者に比べて、いじめによるマイナスの影響だけでなくプラスの影響も大きいことを報告している。

国外においては、Olweus(1992)が、715 校の 8 歳から 16 歳の 130,000 名に対していじめによる影響の長期的な追跡調査を行い、いじめにより自尊感情が失われ、それが成人後にも持続するということや、いじめ加害者では社交性の欠如、抑うつ性の増加、非行や暴力行為の増加が見られた事を報告している。また、Ttofi & Farrington(2008)は、キプロス共和国の小学校 12 校の 182 名の小学生を対象にいじめの影響について調査を行った

ところ、いじめ被害者・加害者共に短期的・長期的に、心理社会的な影響が見られたと報告している。Byrne(1992)は、ダブリンにある 7 校を対象に、いじめ被害者と加害者の影響を調査したところ、いじめ被害者には、社交性の欠如、内向的傾向、心配性などの影響が見られ、いじめ加害者には、感情の抑制の欠如が見られたことを報告している。Sharp(1995)は、13 歳から 16 歳の中等教育段階の年齢の生徒 723 人を対象としていじめの影響について検討したところ、いじめの被害者には自尊心の低下やいじめに対する受動的反応、ストレスの増加からくる身体の不調が見られたことを報告している。これらのことから、いじめ経験は、成長期の心の健康や発達に強く影響するだけでなく、成人期以降の性格形成にも影響することが示されている。

ところで、最近、我が国におけるいじめに関する研究では、いじめには被害者、加害者だけでなく、それを取り巻く幾つかの層があることが指摘されている。森田・清永(1994)は、いじめの立場には、被害者、加害者、傍観者、観衆という 4 層構造があると述べている。下田・石津・大月(2016)は、傍観者の自尊心の低下、抑うつとの関連を指摘している。野中・永田(2010)は、小学生以前や小学校でのいじめ体験による同調傾向は、その後の自尊感情に影響を及ぼし、同調傾向が増えるほど、自尊感情も高くなると述べている。香取(1999)は、いじめ傍観者において、成績の向上、安定志向傾向、同調傾向があることを報告している。これらの知見からも、いじめの解決や予防のためには、加害者、被害者の立場による影響だけでなく、傍観者、観衆、仲裁者の立場による影響も同時に検討することが必要であろう。

文部科学省(2014b)による「いじめ防止対策推進法」第 3 条第 2 項にも「すべての児童等が『いじめ』を行わず、及び他の児童等に対して行われる『いじめ』を認識しながらこれを放置することがないようにする」必要性が指摘されており、児童・生徒が傍観者や聴衆とならないための取り組みも求められている。しかしながら、現在まで国内外におけるいじめに関する研究では、被害者や加害者に焦点を当てたものが圧倒的に多く、傍観

者、聴衆、仲裁者の立場によるいじめの影響について検討したものは十分見られていない。

いじめの立場については、例えば、傍観行動を取る理由について、渡部・奥田・太田（2001）は「自己防衛」「加害者への支持」「無関心」を、久保田（2010）は「いじめへの恐怖」「被害者への帰属」「快楽的動機」「関与の否定」「事態の楽観視」を挙げている。また、それに関連する心理的要因について、朝倉（2004）が「共感性」を、石田・中村（2013）が「友人への同調行動」や「自己肯定感」「大人への信頼感」を、青木・宮本（2002a）が「学校での活動への取り組み意識」「自己利益」、救済・責任意識」「援助性」を、青木・宮本（2002b）が「学校適応感」を挙げている。このように、最近ではいじめ被害者、加害者以外の立場について検討されてきている。多くの者は学校段階において様々な立場のいじめを複数経験することが考えられる。しかしながら、その影響を詳しく検討した研究は十分ではない。

さて、従来開発されてきたいじめに関する尺度としては、秋光・松本・古川・北川・寺戸・阿部・堀井（2016）による「学校におけるいじめ未然防止プログラムのための包括的測定尺度」が挙げられる。これは学校・学級・児童生徒の実態を包括的に測定する尺度であり、26項目の個々の児童・生徒の力を測定する下位尺度と3項目の学級全体の力を測定する下位尺度から成る。また、中学生を対象とした尺度としては、柳田・金丸（2015）による「中学生用いじめスクリーニング尺度（生活アンケート）」がある。これは、中学生のいじめの早期発見・早期対応のために、より精度の高いいじめチェックリストを作成することを目的としており、「LINE 因子」「被害因子」「加害因子」「傍観因子」の4因子構造から成る。

大学生のいじめに関する尺度としては、川西・井村（2009）の「いじめ認識尺度」がある。これは、大学生のいじめ認識を測定するものであり、「絶対悪」「被害者問題視」「あきらめ」「大人の介入」の4因子から成る。いじめ加害者のみの影響については、都築・巖岩（2014）が「いじめ加害者親和性尺度」を作成している。これは、いじめに対する肯定的な態度を測定するものであり「いじめ

普遍性」「いじめの不可抗力」「いじめの受信的肯定」の3因子から成る。いじめの影響に関する尺度としては、香取（1999）の「いじめの影響尺度」があるが、これは、いじめ被害者の立場からのみのいじめによる影響を測定するものであり、「情緒的不適応」「他者尊重」「同調行動」「他者評価への過敏」「情緒的強さ」の5因子から成る。

このように、従来のいじめに関する尺度は、主として、いじめ加害者、被害者に焦点を当てたものであり、その他の立場（傍観者、観衆、仲裁者）にも焦点を当て、これらの影響を包括的に測定することを目指した研究は、見られていない。

そこで、本研究では、大学生を対象として「大学生版いじめによる影響尺度」を新たに作成し、過去において被害者、加害者、傍観者、観衆、仲裁者の5つの立場のいずれか、または、複数を経験したことによる影響を測定する尺度を作成することを目的とする。なお、いじめによる影響は、意識できないことも多いとも思われるが、本研究においては、調査協力者が現在までに意識できている範囲内でのいじめによる影響を測定するものとする。

2. 予備調査

1) 目的

「大学生版いじめによる影響尺度」の質問項目を作成すること。

2) 方法

- ①調査協力者 首都圏A大学の学生53名（男性22名、女性31名、平均年齢20.37歳、 $SD = 1.23$ 歳）。
- ②調査時期 2016年7月に調査を実施した。
- ③調査内容 心理学の授業内において、集団式により質問紙調査を実施した。その中で、過去（小・中・高校時代）に5つのいじめの立場（被害者、加害者、傍観者、観衆、仲裁者）を経験したか否かについて尋ね、今日におけるその影響について、自由記述式により回答するようを求めた。回答は複数回答とした。
- ④倫理的配慮 調査に先立ち、以下の説明を行っ

た。

- i) 調査で得られた回答は統計的に処理し、すべて匿名のものとして扱うため個人が特定されることはない。
- ii) 得られた回答用紙は厳重に保管し、研究後にはシュレッダーなどにて処分する。
- iii) USB 等に保存されたデータは一定期間の保存の後削除する。
- iv) 以上の内容に同意していただけない場合、または、何らかの事情で回答が困難な場合は、回答する必要はない。その場合、回答してもらえなかったことで何らかの不利益を被ることはない。

3) 結果

KJ 法（川喜田, 1967）に基づき、臨床心理学を専攻する大学院生 3 名、大学院指導教員 1 名、第一著者の 5 名が、上記 5 つの立場のいじめの影響についての全ての回答を基にカテゴリーに分類した。その際、特定の立場にしか関連がないと思われる回答は除外した。

その結果、「対人関係の変化」「いじめの連鎖」「第三者的関わり」「ポジティブな変化」「同調」「後悔・心的外傷」の 6 カテゴリーが抽出された。これらに加え、香取（1999）の「いじめによる影響尺度」を参考にし、カテゴリーごとに 5 項目ずつ新たに項目を追加し、6 カテゴリー全 60 項目を作成した。

3. 本調査

1) 目的

予備調査で作成した「大学生版いじめによる影響尺度」の信頼性と妥当性を検討すること。

2) 方法

- ①調査協力者 首都圏 A・B 大学の学生 236 名（有効回答数 182 名、男性 36 名、女性 146 名、平均年齢 19.64 歳、 $SD = 1.14$ 歳）。なお、A 大学における調査協力者は、予備調査とは異なる学部、学科の学生であった。
- ②調査時期 2016 年 11 月に調査を実施した。
- ③調査内容 以下の内容を含む質問紙調査を、心

理学の講義中に集団式で実施した。

(a)「大学生版いじめによる影響尺度（飯盛・加曾利, 2016）」60 項目：まず、質問紙内に書かれた文章を基にいじめの定義を口頭で説明した。いじめの定義は文部科学省（2006）に基づき、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とした。その後、過去における学校段階（小・中・高校）のいずれかにおける 5 つの立場のいじめ（被害者、加害者、傍観者、観衆、仲裁者）の経験の有無について回答を求めた。次に、経験が「ある」と答えた者には、経験した時期を記入した上で（複数回答可）、「大学生版いじめの影響尺度（飯盛・加曾利, 2017）」60 項目に対する回答を求めた。

(b)「いじめによる影響尺度（香取, 1999）」42 項目：構成概念妥当性の検討のための基準尺度として用いた。6 因子の中から「大学生版いじめによる影響尺度」と関連性の少ない「進路選択への影響因子」を除いた合計 5 因子について、それぞれ、因子負荷量の多い順に 5 項目を選定し、合計 25 項目を質問項目として用いた。

④倫理的配慮 調査に先立ち、予備調査と同様の倫理的配慮についての説明を行った。

3) 結果

- ①いじめ立場ごとの分類 いじめ立場ごとの回答人数と割合を求めたところ、複数の立場を経験した者の割合が全体の 70.33%であった（表 1）。
- ②探索的因子分析 まず、「大学生版いじめによる影響尺度（飯盛・加曾利, 2016）」の項目の中の天井効果と床効果が見られた 10 項目を除外し、残った 50 項目について最尤法による因子分析を行った。なお、天井効果は、平均 + SD が「取り得る値以上」となる場合、床効果は、平均 - SD が「取り得る最低値以下」である場合とした。

その結果、固有値の変化から 4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、因子数を 4 に決定し再度、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。共通性が .20 に満たない 8 項目を除外し、残りの 42 項目に対して再度同

表1 いじめ立場の経験人数と割合 (N = 182)

立場	人数	%
①	3	1.65
②	14	7.69
③	35	19.23
④	2	1.10
⑤	9	4.95
①+②	9	4.95
①+②+③	12	6.59
①+②+③+④	3	1.65
①+②+③+④+⑤	4	2.20
①+②+③+⑤	11	6.04
①+②+④+⑤	2	1.10
①+②+⑤	1	.55
①+③	4	2.20
①+③+④	4	2.20
①+③+⑤	1	.55
①+④	1	.55
②+③	17	9.34
②+③+④	7	3.85
②+③+④+⑤	1	.55
②+③+⑤	11	6.04
②+⑤	11	6.04
③+④	7	3.85
③+④+⑤	2	1.10
③+⑤	11	6.04
合計	182	100.00

①加害者, ②被害者, ③傍観者, ④観衆, ⑤仲裁者

様の因子分析を行った。その結果、全ての項目が共通性. 20 を超え (最低値. 24), いずれかの因子に. 35 以上の高い因子負荷量を示す単純構造が見られた。以上から 42 項目をもって「大学生版いじめによる影響尺度」とした。

第 1 因子は「自分への評価が低くなった」「人と接することが怖くなった」など、対人関係における不安感や不信感の項目が多いことから「自己評価低下・対人不安・対人不信」と命名した。第 2 因子はいじめの連鎖や対人関係の変化の内容を含み、「攻撃的な性格になった」「他人のことは気にせず自分中心で生きようになった」など、自身の興味・関心に関連していることから「防衛・自己中心」と命名した。第 3 因子はポジティブな変化を反映する内容や「正しいことを言えるようになった」「いじめられている人を助けるようになった」など、他者に対する善意的な行動に関連していることから「自己主張・対人援助」と命名した。第 4 因子

には第三者的関わりや同調の内容を含み、「いじめの現場を再度見ても見て見ぬ振りをしてしまうようになった」など、他者に無関心に対応するような行動に関連していることから「見て見ぬ振り・追隨」と命名した (表 2)。

③内的整合性 各下位尺度の α 係数は、「自己評価低下・対人不安・対人不信」が. 92, 「防衛・自己中心」が. 84, 「自己主張・対人援助」が. 85, 「見て見ぬ振り・追隨」が. 72 であり、全ての項目において十分な信頼性が得られた。尺度全体の α 係数は. 93 であった。

④下位尺度得点間の相関 下位尺度得点として、各因子における全項目の平均値を算出した。下位尺度得点間のピアソンによる積率相関係数を表 3 に示す。その結果、全ての下位尺度得点間に有意な正の相関が認められた ($p < .01$)。

⑤項目分析 IT 相関および、GP 分析を行った。IT 相関については、「自己評価低下・対人不安・対人不信」で. 52 ~ . 72, 「防衛・自己中心」で. 51 ~ . 72, 「自己主張・対人援助」で. 69 ~ . 81, 「見て見ぬ振り・追隨」で. 66 ~ . 77 であった (全て $p < .01$)。また、GP 分析は、各下位尺度得点の上位 25 パーセンタイルを高群、下位 25 パーセンタイルを低群として、項目ごとに両群の得点差に関する t 検定を行った。その結果、「大学生版いじめによる影響尺度」の全ての項目において有意差が認められた ($p < .01$)。

⑥併存的妥当性の検討 「大学生版いじめによる影響尺度 (飯盛・加曾利, 2017)」の併存的妥当性を検討するために、各下位尺度と香取 (1999) 「いじめの影響尺度」の下位尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、関連する因子と基準尺度との間に有意な正の相関関係が認められた (表 4)。

⑦基本等計量 「大学生版いじめによる影響尺度」の各因子における基本等計量を示す (表 5)。

表2 「大学生版いじめによる影響尺度」の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子 自己評価低下・対人不安・対人不信					
18 自分への評価が低くなった	.76	.00	-.04	-.13	.52
3 人と接することが怖くなった	.75	-.02	-.07	-.08	.61
33 自分に自信が無くなった	.75	.15	-.10	-.12	.51
51 自己嫌悪に陥りやすくなった	.72	.15	-.06	-.08	.59
37 対人関係において不安感を持つようになった	.72	.04	.07	-.03	.54
35 自分への評価が低くなった	.64	.00	.10	.15	.38
39 人の気持ちがわからなくなった	.61	-.04	-.20	.20	.53
1 失敗したことをいつまでも心配するようになった	.61	.04	-.20	-.07	.37
5 人との付き合いに慎重になった	.60	.04	.19	-.20	.47
9 自分の意見を持ってなくなった	.59	.25	-.09	-.11	.51
43 関わらない方がいいという考えが身につくようになった	.58	-.21	.10	.29	.32
58 あまり目立った行動ができなくなった	.58	.33	.03	-.24	.50
23 めんどくさいと思ったことから逃げる癖がついた	.56	.03	-.10	-.05	.41
10 他人の顔をよくうかがうようになった	.55	-.24	-.14	.23	.52
31 偽善者になった	.53	-.27	.08	.16	.35
45 気持ちを表面には出さず内面で我慢するようになった	.51	-.10	.11	.13	.33
30 自分の考えが持てるようになった	.48	-.02	.12	.18	.35
16 正しいことを言えるようになった	.47	-.17	.22	.25	.26
2 周りに流されないで意見が言えるようになった	.47	-.10	.22	.10	.25
47 物事に積極的になった	.44	.07	.05	.05	.32
7 勇気を持てるようになった	.43	.09	-.11	.08	.42
第2因子 防衛・自己中心					
50 攻撃的な性格になった	.05	.66	.16	-.01	.47
26 いじめられている人を助けるようになった	-.03	.66	.08	.14	.46
20 他人のことは気にせず自分中心で生きるようになった	-.20	.64	-.11	.05	.38
21 自分の発言に気を遣うようになった	-.08	.61	-.04	.10	.33
41 人を思いやれるようになった	-.06	.57	.17	.03	.37
49 自分が言ったことで相手がどう感じるか考えるようになった	.28	.51	-.04	.16	.24
60 争い事を避けるようになった	.00	.49	.03	-.04	.52
57 周りに合わせる行動が増えた	.14	.46	-.02	.01	.38
13 誰にでもいい顔をして嫌われない行動をするようになった	.23	.46	.00	.10	.28
56 人の悪口を言わないようになった	-.05	.46	.02	.23	.27
4 罪悪感を感じやすくなった	.10	.38	.03	.20	.26
第3因子 自己主張・対人援助					
44 正しいことを言えるようになった	.00	.10	.80	-.16	.64
46 常にいじめになるかどうかを考えるようになった	.10	-.07	.74	-.11	.55
22 自分の考えが持てるようになった	-.17	.11	.73	.02	.54
36 物事に積極的になった	-.15	.11	.69	.14	.51
27 周囲から信用されるようになった	.05	.03	.64	.07	.44
55 いじめられている人を助けるようになった	.09	-.04	.62	-.20	.40
第4因子 見て見ぬ振り・追従					
53 いじめの現場を再度見ても見て見ぬ振りをしてしまうようになった	-.04	.12	-.15	.70	.50
34 悪いことをしているのを見ても見て見ぬ振りをするようになった	.12	.11	-.04	.58	.43
38 強い人の後ろについていくようになった	.02	.29	.05	.54	.43
8 自分が攻撃されないように加害者側になろうとするようになった	-.06	.33	-.07	.42	.29
因子間相関		1	2	3	4
	1		.36	.08	.38
	2			-.04	.12
	3				.12
	4				
信頼性係数		.92	.84	.85	.72
信頼性係数（全体）		.93			

表3 「大学生版いじめによる影響尺度」の下位尺度得点間の相関関係

	①	②	③	④
①自己評価低下・対人不安・対人不信		.43**	.07	.42**
②防衛・自己中心			.05	.46**
③自己主張・対人援助				-.01
④見て見ぬ振り・追隨				

** $p < .01$

表4 「大学生版いじめによる影響尺度」と「いじめによる影響尺度（香取，1999）」の因子間の相関係数

	大学生版いじめによる影響尺度			
	自己評価低下・対人不安・ 対人不信	防衛・自己中心	自己主張・対人援助	見て見ぬ振り・追隨
いじめによる影響尺度				
情緒的不適応	.26**	.21**	.08	.23**
他者尊重	.00	-.08	.25**	.09
同調傾向	.27**	.01	-.06	.20**
他者評価への過敏	.19*	.03	.02	.23**
精神的強さ	-.04	-.03	.29**	.09

* $p < .05$, ** $p < .01$

表5 「大学生版いじめによる影響尺度」の基本等計量

	M	SD	最大値	最小値
自己評価低下・対人不安・対人不信	2.40	.52	3.57	1.00
防衛・自己中心	2.53	.45	3.45	1.00
自己主張・対人援助	2.43	.60	3.83	1.00
見て見ぬ振り・追隨	1.88	.56	3.50	1.00

4) 考察

本研究は、過去において被害者、加害者、傍観者、観衆、仲裁者の5つの立場のいずれか、または、複数を経験したことによる影響を測定する「大学生版いじめによる影響尺度」を作成することを目的とした実施した。

予備調査により収集された60項目について探索的因子分析を行ったところ、「自己評価低下・対人不安・対人不信」「防衛・自己中心」「自己主張・対人援助」「見て見ぬ振り・追隨」の4因子42項目が抽出された。本尺度の構成概念妥当性は、香取（1999）による「いじめの影響尺度」を基準尺度と両者の相関分析により検討した。香取（1999）の「いじめによる影響尺度」では「情緒的不適応」「他者尊重」「同調傾向」「他者評価への過敏」「精神的強さ」「進路選択への影響」の6因子を抽出している。「大学生版いじめによる影響尺度（飯盛・加曾利，2016）」に関連する因子と香取（1999）による基準尺度の因子との間に有意な正の相関関係が認められたことから妥当性が

確認された。また、本尺度では Cronbach の α 係数が十分に高い値であり、下位尺度得点間の相関、項目分析の結果から信頼性が確認された。本尺度においては、いじめ被害者だけでなく被害者、傍観者、観衆、仲裁者の影響も測定する項目を含んでいるため、新たに「防衛・自己中心」や「見て見ぬ振り・追隨」の因子が抽出されたと言える。

以下、従来のいじめに関する尺度との関連から本尺度を考察する。秋光ら（2016）の「学校におけるいじめ未然防止プログラムのための包括的測定尺度」では、「他者と関わる力」が特に強調され、いじめの防止には「他者と関わる力」を含むソーシャル・スキルが重要となることが示唆されている。「大学生版いじめによる影響尺度（飯盛・加曾利，2016）」では5つの立場によるいじめの影響として4因子（「自己評価低下・対人不安・対人不信」「防衛・自己中心」「自己主張・対人援助」「見て見ぬ振り・追隨」）が抽出された。その中でも特に「自己主張・対人援助」は元来持っている「他者と関わる力」の弱さに由来することも

考えられる。このことから、今後いじめの影響を低減させる取組みとして、「他者と関わる力」を含むソーシャル・スキルを向上させることが有効であると考えられる。

ところで、川西・井村(2009)は「いじめ認識尺度」を堀井・槌谷(1995)の「対人信頼感尺度」と今野・堀(1998)の「正当世界尺度」との相関関係から検討している。その結果、「いじめ認識」と「対人信頼感」「正当世界」間には負の相関が認められ、人に対して不信感を抱き世の中は不平等であると思う者ほど、いじめに対応することを諦めてしまい、いじめ被害者として問題を捉えやすいという可能性が示唆されている。このことから、いじめ経験から「自己評価低下・対人不安・対人不信」の影響を持った者は、いじめに対して容易に諦めの感情を抱き、いじめを正当化しようとする可能性が考えられる。そのことにより、一層いじめ被害者としての立場が固定化されてしまう可能性もあるため、いじめ認識という視点からこの悪循環をさらに検討する必要がある。

今後、本研究で作成した尺度が複数のいじめ立場を経験したことによるいじめの影響を測定することを可能にし、その影響を認知・行動特性や性格等との関連から検討することが可能となると考える。それに加えて、今後は、近年話題となっているネットいじめについての項目も加えさらに検討していくことが必要であろう。原(2011)は、ネットいじめによる影響として「時間を拘束されるようになる」「自らの秘密を友達にあまり言えないようになる」などを挙げている。今後は、このような時間感覚や対人関係への影響についても、さらに検討していくことが望まれる。

引用文献

秋光恵子・松本剛・古川雅文・北川真一郎・寺戸武志・阿部浩士・堀井美佐(2016). 学校におけるいじめ未然防止プログラムのための包括的測定尺度開発の試み. 広島教育大学研究紀要, 48, 21-28.

Analitis, F., Velderman, M.K., Ravens-Sieberer, U., Detmar, S., Erhart, M., Herdman, M., Berra, S., Alonso, J., Rajmil, L., & European Kidscreen Group.

(2009). Being Bullied: Associated Factors in Children and Adolescents 8 to 18 Years Old in 11 European Countries. *Pediatrics*, 123, 569-578.

青木洋子・宮本正一(2002a). いじめ場面における第三者の行動. 岐阜大学教育学, 心理学研究紀要, 15, 45-58.

青木洋子・宮本正一(2002b). いじめ場面における第三者の行動—周囲の生徒の影響と学校生活意識の観点から. 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学), 51(1), 201-209.

朝倉隆司(2004). 中学生におけるいじめに関わる役割行動と敵意的攻撃性, 共感性との関連性. 学校保健研究, 46, 67-84.

Byrne, B. (1992). Bullies and victims in a school setting with reference to some Dublin schools. *The Irish Journal of Psychology*, 13, 574-586.

原 清治(2011). ネットいじめの実態とその要因(1) —学力移動に注目して—. 佛教大学教育学部論集, 22, 133-152.

堀井俊章・槌谷笑子(1995). 最早期記憶と対人信頼感との関係について. 性格心理学研究, 3, 27-36.

今野裕之・堀洋道(1998). 正当世界信念が社会状況の不公正判断に及ぼす影響について. 筑波大学心理学研究, 20, 157-162.

石田靖彦・中村友一(2013). 中学生のいじめ体験に関する研究—いじめの立場における心理的特徴—. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 3, 123-130.

香取早苗(1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究. カウンセリング研究, 32, 1-13.

川喜田二郎(1967). 発想法: 創造性開発のために. 136, 中央公論社.

川西玲子・井村弘子(2009). 「いじめ認識尺度」作成の試み—大学生はいじめをどう見ているか—. 沖縄心理学研究, 32, 2-3.

国立教育政策研究所(2010). いじめ追跡調査 2007-2009 いじめ Q&A. http://www.nier-go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-201-2012.pdf.

国立教育政策研究所(2013). いじめ追跡調査 2010-2012 いじめ Q&A. <http://www.nier-go.jp/shido/centerhp/shienshiryou23.pdf>.

- 小山祥明・庄司正美 (2012). 過去のいじめ体験が大学生の就職不安に及ぼす影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 300.
- 久保田真功 (2010). 逸脱傾向にある子供たちはなぜいじめを黙っているのか?—中学生を対象とした質問紙調査をもとに—. 生徒指導研究, 9, 57-66.
- 三島浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から—. 実験社会心理学研究, 47(2), 91-104.
- 文部科学省 (2006). いじめの定義. <http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.htm>.
- 文部科学省 (2014a). 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/_icsFiles/afeldfile/2015/10/07/1362012_1_1.pdf.
- 文部科学省 (2014b). 別添 3 いじめ防止対策推進法 (平成 25 年法律第 71 号). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337278.htm.
- 森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究. 日本臨床心理研究, 22, 4, 441-446.
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新改訂版いじめ—教室の病. 金子書房.
- 村山恭朗 (2015). いじめ加害と被害と内在化/外在化問題との関連性. 発達心理学 研究, 26(1), 13-22.
- Nansel, T.R., Craig, W., Overpeck, M.D., Saluja, G., Ruan, W.J. & Health Behaviour in School-aged Children Bullying Analyses Working Group (2004). Crossnational Consistency in the Relationship Between Bullying Behaviors and Psychosocial Adjustment. *Bullying Behaviors and Psychosocial Adjustment. HBSC Study and the HBSC Bullying Analyses Working Group*, 158(8), 730-736.
- 野中公子・永田俊明 (2012). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響—体験の時期と発達の関連. 九州看護福祉大学紀要, 12(1), 115-124.
- Olweus, D. (1992). Victimization by peers: antecedents and long term outcomes. *Social withdrawal, inhibition and shyness in children*, 315-341.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差. *社会心理学研究*, 11(2), 105-115.
- Sharp, S. (1995). How much does bullying hurt? The effects of bullying on the personal well-being and educational progress of secondary aged students. *Educational and Child Psychology*, 12, 81-88.
- 下田芳幸・石津憲一郎・大月友 (2016). 中学生のいじめ傍観・仲裁行動と自己価値の随伴性, 体験的回避, 抑うつとの関連. *心理臨床学研究* 33(6), 602-612.
- 都築明日香・巽岩秀章 (2014). いじめ加害親和性尺度の構造. 埼玉工業大学人間社会学部紀要, 12, 47-52.
- Ttofi, M.M & Farrington, D.P. (2008). Bullying: Short-Term and Long-Term Effects and the Importance of Defiance Theory in Explanation and Prevention. *Victims & Offenders*, 3, 289-312.
- 渡部雅之・奥田陽子・太田祥子 (2001). いじめへの介入における傍観者と教師の意識と役割. 滋賀大学教育学部紀要Ⅱ 人文科学・社会科学, 51, 19-33.
- 柳田美智子・金丸隆太 (2015). 新しい中学生用いじめスクリーニング尺度開発—予備調査による妥当性検証—. 茨城大学教育実践研究, 34, 239-248.

謝辞

本論は、平成 29 年度文京学院大学大学院人間学研究科修士論文を加筆・修正したものです。研究の遂行にあたり、調査にご協力下さった先生方、学生の皆さん、貴重なコメントを下さいました先生方に、衷心より感謝申し上げます。

(2018. 9. 26 受稿, 2018. 10. 31 受理)

